

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男

カンパチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 紅い刃を持つ男

### 【Nコード】

N2060BA

### 【作者名】

カンパチ

### 【あらすじ】

機動六課になのは、フエイト、はやての知るある男がやってくる。その男が来たことで始まる物語。

## ブログ（改）（前書き）

はじめまして、カンパチです。

初投稿なんで暖かい目で読んで下さい。かなりのグダグダなのでご注意を。

## プロローグ（改）

【魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男】  
プロローグ

??? side

新暦75年3月

地上本部特務一課部隊長室

「は？・・・今、何とおっしゃいましたか？」

「えーと。シュタインブルグ三佐を4月から機動六課へ出向とします。」

「つまり、特務課から新設の機動六課へと左遷ですか？クラン少将。」

俺事、アウル・シュタインブルグは今クラン少将より通達を受けた。  
（しかし、何か変なことでもしたか？左遷なんて有り得ねえ。）  
そう思っていると

「やだ、あんたみたいな優秀な手駒を簡単に手放す訳ないでしょ。」

「なら、何故。まさか、またゴマすったんですね？」「ギクッ！？」  
（・・・この女狐ね。まあ、いつものことだが。）

「ハア。・・・もういいです。でも、理由ぐらい聞いても宜しいですか？」

「エー。めんど「殺しますよ。（チャキ）」ハイッ。話すからロー  
エングリンを出さないで」（泣）。」

（つつく。さつさと話せばいいのに。）

「実は、機動六課の後援が教会でね。あのオッサンが反対してね。」

「かなり説明不足ですが、監視役ですか？」

「大正解！！これでどちらにも貸しをつくれたからハッピーよね  
！。あと、君にとってはこの話で損はしないと思うけどな。」

（……………は？）

side out

なのはside

今、わたしとフェイトちゃんとはやてちゃんは、スバルとティアナ  
への機動六課への勧誘を終えて解散するはずだったんだけど…………  
。。。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。耳に入れといてほしい話がある  
んやけど。」

「どうしたの？はやてちゃん。急に話したなんて。」

「実は、機動六課に新しく出向になった人がいるんよ。特務課から

の人やねんけどな。特務一課のクラン少将直々の推薦なんやて。」

「「えッ!!?」」

「どうして、そんなところから。」

フェイトちゃんの言う通り、エリート部隊の特務課から、しかもあのクラン少将の推薦だなんて。でも、それだけじゃないみたい。

「そんな事よりも大事なことがあねん。出向してくる人物や。」

「その人がどうしたの?」

(特務隊つてとこより大事なところつて。アレ?はやてちゃんなんだか嬉しそう?)

「ふっふっふ。実はうちら皆知ってる人やで。」

(えーと。わたし達が知っていて、はやてちゃんが嬉しくなるほどの人って。。。)

「まさかっ!!」

「そう、そのまさかや。」

「「アウル(くん)っ!?!」」

(嘘。アウルくんが機動六課に。)

わたしはアウルくと久しぶりに会えることに嬉しさを感じた。

「久々にみんな揃うんだね。アウルどれだけ成長したんだろ。」  
（フェイトちゃん。なんだか親の心境になってるけど、一個下だよアウルくん。でも、楽しみだなあ。）

そんな事を思いながら、みんなで今後のことについて話し合った。

s i d e o u t

## ブローグ（改）（後書き）

エー。かなりグダグダでした。

これから、少しずつ修正していきたいと思います。

次回は、機動六課始動編です。



## 第1話（前書き）

はじめまして、カンパチです。

初投稿なんで暖かい目で読んで下さい。かなりのグダグダなのでご注意を。

修正：2012 / 1 / 9

## 第1話

【魔法少女リリカルなのはStrikers 紅い刃を持つ男】

## 第1話

アウルside

「ここか、機動六課ってのは。地上本部からかなり遠いな。なあ、ローエンゲリン。」

地上本部から40分以上かかるなんて。めんどくせえ。

「そうだな。しかし、お前と話している暇はなさそうだ。」

デバイスであるローエンゲリンがそう呟く。

「どういうことだ？」

「クラン少将からのデータによるともう少しで式が始まるようだ。」

「おっと！いけね。なら、早く部隊長に挨拶しにいかねえとな。」

「ああ。」

機動六課の隊舎に入ると、ロビーの方でちらほら人が集まっているがまだ少ないようだ。部隊長室の場所が分からないので、近くにいたオレンジ色の髪をした少女に話し掛けてみる。

「すまない。少しいいだろうか。」

「はい。何でしょうか。」

「自分は、今日からここに配属となったアウル・シュタインブルグ三等特佐だ。部隊長室の場所が分かったので案内できる者はいないか？」

「！？ 特務隊！！ しっ、失礼しました。自分はティアナ・ランスター二等陸士でありますっ。」

まあ、機動課に特務課の人間が来る事が少ないからな驚きもするかどうか思いながら話を続けることにする。

「そんな力まなくてもいい、ランスター二士。それで、場所が分かる者はいないか？」

「なら、自分をご案内させていただきます。」

「ああ、よろしく頼む。」

「はいつ!!」

「こちらになります。」

「ああ、すなまなかつたな。ありがとう。」

「いえ。では、失礼します。」

そういつて、ランスター二士と別れて、部隊長室の前までいく。そういえば、部隊長の名前って知らないな。クランさんが「会えばわかる!!」なんて言ってたが誰だ？

そう思っているとドアの前まで来てしまった。いけね。切り替えねえと相手さんに失礼だ。気持ちを切り替えて、呼出しのボタンを押す。

「はい。入ってええよ。」

ん？なんだ？

この独特な話し方に聞き覚えを感じつつもドアをスライドさせ挨拶をする。

「失礼しま・・・。」中に入って自分は思考が停止してしまつた。その理由だと。中にいた人物が俺のよく知る奴らだったからだ。

「くく久しぶり（だね）（やな）、アウル（くん）。」「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・失礼しました。」

「くくええーっ!?ちょっと待って（ちーや）!!!!!!どうして出て

いくの（んや）！？」「」

いやいや、すごいハモリだな。

とツツコミを心の中に留めておく。

「何か違うことを考えておるだろう。それよりもはやく挨拶しないか。」

ローエングリンに諭され落ち着く俺。何か悲しい。

「すまない。この部隊にお前達がいるなんて知らなかったからな。つい、驚いただけだ。久しぶりだな、なのは、フエイト、はやて。これからよろしくな。」

「」うんつつ！！」「」

だからハモるなよ。

別のところにツツコミをいれつつ、久々の再会を喜んだ。

side out

人物・デバイス設定＋用語解説（ネタバレ注意）（前書き）

今後の話しの構想が浮かばないので、先に投稿します。

## 人物・デバイス設定＋用語解説（ネタバレ注意）

？「人物設定」

アウル・シュタインブルグ  
面倒臭さがりな主人公

年齢：18歳

性別：男

身長：174？

髪型：セミロングの茶髪

顔：バランスの取れた中性的な顔立ち

出身世界：？？？

所属：特務一課戦闘部隊長 機動六課FW部隊コールナンバーロン  
グアーチ05

階級：三等特佐（他の三佐とあまり変わらず）

術式：近代ベルカ式主体  
（ミッド式も一応使えるが滅多に使わない）

魔力ランク：S（リミッター時AA）

魔導師ランク：S -

魔力光：青

デバイス：ローエン格林

好きなもの：麺類、デバイス研究、旅行、友人、家族

嫌いなもの：辛いもの、デスクワーク（苦手ではなくただ面倒なだけ）、人を見下す人

3年前に設立された特務一課の戦闘部隊長に入隊から約1年で上り詰めた男。

二つ名で「マグダナの紅い刃」と呼ばれている。

彼の戦術スタイルによって、ミッド式主流だった風潮からベルカ式を再検討する動きがでるほど。

しかし、私生活となると極普通の生活しかない（何かするのが億劫なだけ）。なのは達とは、6年前の任務で知り合ってから付き合い合い。

管理局入局以前の経歴が不明であり、それを知っているのは克蘭のみ。

克蘭・セアトニック

年齢：25歳

性別：女

身長：156？



髪型：黒のロング

顔：生粋の日本人に見える。しかも、かなりの美人。

出身世界：第1管理世界

“ミッドチルダ”首都クラナガン

所属：特務一課部隊長

階級：少将

術式：ミッド式

魔力ランク：A A

魔導師ランク：A A +

魔力光：深緑

デバイス：特務隊制式採用銃型デバイス N173

管理局内でもかなりの権限を持つ特務隊総司令官。

3年前に特務隊を立ち上げた張本人。管理局屈指の戦略家であり、管理局の腐敗を憂いその優れた知略を使い管理局を変えようとしている。

ちよつとお茶目なお姉さんでアウルをいじるのが愉しみ(?)の一つ。だが、よくアウルにOHANASIを受けているらしい。アウルの過去を知る唯一の人。

## 「デバイス設定」

### ローエン格林

管制人格：男 オッサン

アウルが独自に造りあげた両刃剣型のアームド型インテリジェントデバイス。

通常時の色は灰色だが、剣の内部に魔力流し込み、高速震動させることによって赤く発光し、AMF環境下でもカジェットをいとも簡単に切り裂く事が可能。

更に、剣内部で魔力を圧縮して刃にある隙間から魔力刃を打ち出す事も可能。

完成してから10年も経っていないのにかなりオッサンみたいに達観している。更に、マスターのアウルに人生論を語ったりする。

アウル曰く、そんなデータを組み込んだことはないという。

### N173

特務隊制式採用銃型ストレージデバイス。

簡易AIを搭載している。

3つのモードを使用可能。

#### ・アサルトモード

連射性能を追求したモードで、牽制用として主に使用される。

ただし、一発の威力が低いうえに誘導性能が全くない為にこのモードのみで戦闘は難しい。

#### ・ショットモード

面制圧を目的としたモードで、銃口から20発の小型魔力弾を一斉に発射して相手にダメージを与える。

カートリッジをロードすれば、ガジェット?型でも一撃で破壊可能。  
・スナイパーモード

狙撃を目的としたモードで、支援能力に優れている。このモードは、連射が可能なのが特徴。射程は500メートル。

?「用語解説」

## 特務隊

5年前に起こったクーデター未遂事件“マグダナ事件”を背景に3年前、管理世界でのテロや広次元犯罪の取り締まり組織として、克蘭・セアトニック(当時、一等空佐)が中心となって設立される。独立行動権や単独調査権、予算請求権、人員徴収権の一部が認められており、かなりの権限を持つ。

現在、まだ一課しか稼動しておらず人手不足が深刻。

人員は現在80名(戦闘員はうち24名)。

## マグダナ事件

5年前に第51管理世界の主星“マグダナ”で発生したクーデター未遂事件。

クーデター側として、次元航行艦2隻と魔導師107名が参加。鎮圧側として、次元航行艦2隻と魔導師56名が参加。

管理局設立以降初の艦隊戦となる。

この事件で、アウル・シュタインブルグ(当時、空曹)は次元航行艦一隻航行不能、魔導師29名撃墜という華々しい戦果をあげ、二階級特進を果たし、「マグダナの紅い刃」と呼ばれる様になる。

## 第2話（前書き）

頑張って、書いてみましたが、中途半端になってしまいました。

第2話ですどうぞ。

修正：2012 / 1 / 9

## 第2話

アウル side

あれから、感動の再会に浸ることはできず。すぐ後にやって来たグリフィス准尉の催促によって隊舎のロビーで機動六課の稼動式に、はやての右隣りに並んでいる。

しかし、この部隊は女性が多くないか？戦闘員なんて俺と赤髪の少年しかいねえし、しかも10歳前後とみた。

・・・・・・はあ。

上手くやってけるかねえ、俺。自信ねー。

『何をそんなにしよげておるのだ？』

ローエングリンが念話で話し掛けてくる。

『だってよお・・・。ここの部隊、女性率高すぎだぜ。面倒臭さそうだ。』

『馬鹿者。人脈の狭い八神がここまでの部隊をつくるといったら知り合いに頼むしかないだろう。』

『分かってるわそんなことぐらい。けどよお。』

『諦めて慣れるんだな。』

こいつ、何でこんなに達観してるんだ？  
などと考えていると、はやてが俺の名前を呼ぶ。

「ほな、うちの役目は終らせたまかい。アウル、自己紹介しいや。」

「いきなり何言い出すんですか、八神部隊長。」

「ええやないか別に。この部隊のなかでアウルだけはみ出しもんみたいやからなあ。今のうちに顔覚えてもら「辞退いたしま」命令や。  
「・・・了解。」「・・・よしっ！」

チクショー。新手的嫌がらせか？

『そんな訳ないやろ。』

『何故、心が読めるっ！』

『そんなんどおでもええから、はよいつつっ！！』  
いやいや、良くないよ！？俺にとっては死活問題ですよ！はやてさん！？

などと考えていたが、隊員の皆さんの視線にたえられず、渋々挨拶を始める。

「えー。皆、初めて会う者が多いと思う。自分は、アウル・シユタインブルグ三等特佐だ。本日より、特務一課からこの機動六課へと出向となった。この部隊では、八神部隊長の補佐や高町教導官の補佐って、補佐が多いがよろしく頼む。」

フーッ。何とかそれらしくなったぜ。

「何や、案外まともやな。」

「一応、これでも指揮官だったもので。」

などと、はやてと言い合っていたが、いきなり前から声があがる。

「ア・アウル・シュタインブルグ！！？」 “マグダナの紅い刃” ！！  
「どうして、こんなところに！！？」

ん？何で、その名前しってるんだ？特務隊では、そんなにいわれないから知らないと思ったが冷静に対処することにした。

「ああ、私はその名で呼ばれているが、その名前は苦手だなあまり呼ばないでくれないだろうか？」

「はっ、はいっ！！！」

うん。そんなに有名なのか？俺。

「なあ、なのは。」

「ニヤッ！！ な、何かな？アウルくん。」

「俺ってそんなに有名なのか？あまり他の部隊に足を運ばないからな。わからないんだ。」

「うんっ！凄い有名だよ！！テレビや雑誌でよく取り上げられてるよ。知らないの？」

『いや、知らないんですけど……っ！！まさかっ！！』

『どうしたの？』

『何でもない。ありがとな、なのは。』

『?? ううん。別にいいよ。』

あのヤロウ……黙ってやりやがったな。

「ほな、アウルの紹介も終わったからこれで解散な。」

俺がある女性に怒りを感じているうちに、はやてが話しをしめていた。

「で、これから新人達と顔合わせするわけだが。どんな奴らなんだ？なのは。」

「凄いいい子達だよ。育てがいがって、とても楽しみだよ!？」



「・・・・・・・・・・。」

「どうしたの？急に黙っちゃって。」

「・・・・・・・・余り無茶はするなよ。」「へ？」

「だからっつ！？無茶はしないでくれって言ってるんだ！！・・・  
久しぶりに会ってすぐに倒れられたら面倒臭さいからな。」

「・・・・・・・・ふふつ。」

「何だよ。」

「ん〜。素直じゃないね、アウルくん。」

「・・・何じゃそりゃ。」

「ふふつ。あつ、あの子達だよFWのメンバー。」

気まずい雰囲気（俺的に）の中、なのはが指差した方をみる。確かに4人の少年少女達がいた。  
なのはがその子達に呼びかける。

「みんな揃ってるかな？」

「「「「はいつ！」「」「」」

「おっ！いい返事だ。一応挨拶するぞ。俺はアウル・シユタイン

ブルグ、階級は三等特佐だ。気軽にアウルと呼んでくれ。階級なども付けなくていいぞ。」

「スバル・ナカジマ二等陸士です。」

「ティアナ・ランスター二等陸士です。」

「エリオ・モンディアル三等陸士です。」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士と相棒のフリードです。」

「キュクー。」

「スバルとティアナとエリオとキャロとフリードだな。これから1年よろしく頼むな。」

「『『『『よろしく願いしますっっ!!』『』『』『』

『確かにいい子達だな、なのは。』

『んふふー。そうでしょ。』

そんなことをなのはと念話しながら皆で訓練場に歩いていった。

FWメンバーは、訓練着に着替えに行ったんで、なのはと訓練場に來ていた。すると、俺達が來た方とは反対側から一人の女性が走っ

てくる。

「なのはさーん！」

「シャーリー！」

なのはの知り合いの様だなと思っていたら、FWメンバーもやって来た。

「ちょうどよかった。シャーリー、挨拶お願い。」

「はい。シャリオ・フィーノー等陸士です。気軽にシャーリーって呼んでね。私はメカニック担当なので、皆さんの訓練の様子も見させてもらうからよろしくね。後、デバイスについて聞きたいことがあつたら何でも聞いてね。」

「『はいつ！』『』『』」

「アウル・シュタインブルグだ。アウルと呼んでくれて構わない。」

「分かりました、アウルさん。」

「えーと。今返したデバイスには、訓練用のデータチップが入って

いるから、いつもより大事に扱ってね。」

「……はいつ!」「」

「さーて、じゃあ早速訓練始めよっか。」

「あ、あのー。ここですか?」

「何もないですよ。」

確かにないもないな。こんな所でどうやって訓練するんだ?すると、なのはが。

「シャーリー。」

「はい!ステージセット。」

シャーリーが電子端末のボタンを押すと、何もない所からいきなり都市が出て来た。

「すごーい!」

「スバル、うつさい!」

スバルがはしゃいで、ティアナは止めてるが、内心驚いてるみたいだ。

スゲエなこりゃ……。こんな所に金使うのかはやてのやつ。自分も内心驚きつつもそれを外には出さない。指揮官になってからのくせだ。

「しかし、空間シュミレーターとはやるな。」

「そうでしょ。この部隊の唯一の見所だってはやてちゃんが言ったよ。」

はやてよ他に見所はつくれなかったのか？  
そう心の中で呟きつつも訓練を開始した。

「みんな、準備はいいかな？」

「「「「はいっ！」「」「」」

「うん、いい返事。じゃあ、シャーリーお願い。」

「動作レベルC、攻撃精度Dってどこですかね？」

「そうだね。先ずは軽く8体から。」

「まあ、それぐらいなら大丈夫だろう。」

シャーリーが端末を操作してターゲットを出す。その間になのはが解説と。

ガジェット・ドローン。自立行動型の魔導機械で、このタイプは近づいてきたら攻撃するやつだ。

さて、皆さんの实力を見せてもらおうとしますかね。

そう思いながら、彼女達の姿を眺めていた。side out

## 第2話（後書き）

次で、初日を終らせたいなとない頭でひねっています。

次回も頑張りますので、是非読んでください。

### 第3話（前書き）

初日終わらなかった。

では、第3話どうぞー！

修正：2012 / 1 / 9

### 第3話

アウル side

ただ今、絶賛新人達の訓練を見ている最中だが、あいつらガジェットの性能を見極める前からバラバラに攻撃してやがる。

初のエリオやキャロなら分かるが、スバルとティアナは幾つか任務をこなしてるはずなのに。

などと考えていると、ガジェットのAMFが作動したようだ。あっ、スバルがビルに突っ込んだ。その後、なのはの説明会があつて皆動き出した様だ。

「みんな、よく走りますねー。」

「危なっかしくて、ドキドキだけどね。」

「全くだ。ティアナは指揮を始めるのも遅いし、纏められてはいるみたいだが。先が思いやられる。」

「そうだけど……。アウルくん厳しすぎない？」

「ま、これからビシバシ育てりゃいいだけだ。……………面倒だ



が。」

「アウルくん。聞こえているよ？（ニコッ）」

「最後のは取り消すから、先ずはそのレイジングハートさんを下ろしてくれないか？なのは。」

いきなりセツトアップして、アクセル6個も出すなよ。生身なら、ケガじゃすまねえよ。

「んもう。アウルくん、直ってないんだねその癖。」

「その癖って、面倒臭さがりなとこですか？なのはさん。」

シャーリーが端末を操作したままなのはに聞いているが、手止まっていなぞ。あれ出来る奴は管理局に何人いるだろ？

……いたわ、あのいたずら好きな少将が。

「そうなの！？知り合った頃からずっとだよ！！いつも直してって言ってるのに、全く直そうとしないの！これ、どう思う？シャーリー！」

「い……いや、そんなこと言われても。」

なのはが凄い勢いでシャーリーに詰め寄る。

なのはさーん、今教導中ですよ。あなたが主役デスヨー。

「はっ！？今教導中だったんだ！」

俺の思いが通じたのか、なのはが復活した。ついに馬鹿になったか

？なのは。

「アウルくん。後で、模擬戦ね。」

「え？」

エエーッツ！？

なのはのいきなり模擬戦発言の説明もないまま、FWメンバーの訓練が終了した。

「お疲れ様。どうだった？訓練、厳しい？」

「はい……。」

「かなり……。」

キャロとティアナが答える。

まあ、一応アドバイス位いうか。上官だし。

「よしっ。この模擬戦を見てみて、言いたいことがある。聞いてく

れ。」

「『『『はいつ!』』』」

「まずは、スバルとエリオだが。攻撃が直線的過ぎる、もう少し考えろ。後、スバル。指示もなしに動くなよ、部隊が混乱する場合があるぞ。」

「は・・・はい。」

「頑張ります。」

「次に、ティアナとキャロ。周りをよく見て行動しろ。センターとバックは状況判断力が重要となる。以後、このことを心に留めておけ。」

「はい・・・。」

「有り難うございます。」

「・・・まあ、新人にしては上出来だ。まだまだ、成長出来ると断言してやる。励めよ。」

「『『『ッ!』?は・・・はいつ!』』』」

「うんっ。みんなの改善点も分かったことだし。もう一戦いきたいけど・・・。アウルくん。」

「なのは、ホントにやらないといけないか？」

「うんっ！…みんなの勉強にもなるしね！」

ダルいんですけど！！

「なら、なのはがやればいいだろ。」

「フーン。あの時言ったことは嘘なんだ！」

・・・・・・

・・・・・・

・・・ハア。

「やればいいんだろ。」

「じゃあ、みんな休憩ね。アウルが模擬戦するから、見学だよ。あ・  
・でも、後でレポート提出だよ？」

「エエッ！？」

「アウルさんが！？」

「マグダナの紅い刃の実力を見れるんですかッッ！？」

「すごーい！！！」

・・・そんな輝いた目で見るな。泣きたくなるだろう？

「アウルくん。準備はいいかな？」

「ハイよ。じゃあローエンゲリン、頼むぞ。」

「心得た。」

「セットアップッッ！！」

そういつて、バリアジャケットを展開する。因みに、俺のバリアジャケットは黒のロングコートに黒のズボンで、腕には赤いラインが入っている。ほぼ、黒一色だな。

次にローエンゲリンは、今はただの灰色の剣だ。

「こちらは準備完了した。始めてくれ、なのは。」

「分かった。じゃあ、ガジェットは20体、動作レベルB、攻撃精度Bだよ。時間は10分以内！！」

「了解した。」

俺が了解の意思を表示すると、ガジェットが出て来た。

「それじゃあ、レディー・・・ゴースツ!？」

なのはの合図で、俺はガジェットの群れに向かっていった。

s i d e o u t

ティアナ s i d e

アウルさんの模擬戦が始まった。なのはさんが言っていたことには、あのガジェット達は自分達の時よりも動きや攻撃のレベルが上がっているらしい。

すると、アウルさんのデバイスが赤く発光し始める。

「赤くなっただ!?」

スバルが驚いてるけど、あの人の二つ名知らないのかしら？

バカッッ!! スバルのことはいいから集中しなきゃ!？

( 酷いよ、ティアナ。 )

？何か聞こえた気がしたけど。きのせいね。  
などと考えているうちに、アウルさんが纏まってる3体を両断して、さらに近くにいた1体を“ソニックムーブ”を使って移動して突き刺す。

続いて、彼はガジェットを刺したまま剣を振るう。すると、魔力刃が飛び出して刺さっていたガジェットを切り裂いてその先のガジェット2体をAMFを貫通して切り裂く。  
そして、そのままガジェットの集団に飛行魔法を使ってガジェットの攻撃の雨を普通では有り得ない動きをしながら回避しつつ、接近していく。

「な、何ですか！？あの動き！！」

「身体向きを変えずに進行方向を変えるなんてっ！！？」

「あの攻撃の雨を障壁無しで！？凄い・・・。」

「ふえーっ！？」

みんなが驚嘆の声を上げてるけど当たり前だわ。私だって夢を見ているみたいだもの。

「はじめて見た人はやっぱり驚くよね。アウルくんの動きは。」

「なのはさん。アウルさんはどうしてあんな動きが出来るんですか？」

「うーん。後でアウルくんに直接聞いた方がいいと思うよ。」

そんなやり取りのなかもアウルさんはガジェットを次々撃破している。

やっぱり、凡人は私だけ……。でも、強くなってみせる！！私の夢の為にも！？

私は、そう誓いながらアウルさんを見ていた。

side out

アウルside

「ローエン格林。あと何体だ？」

「8体だ。あと192秒しかないぞ。遊んでないではやくやれ。」

「分かりました……。よっ！？」

ローエン格林と会話しながら、ガジェットの群れの中を飛び回り2体撃破。



「さてと、仕上げといくぞ。カートリッジロード。」

「ライザーモード!!」

カートリッジを2本ロードして、ローエン格林に魔力を溜める。

「“デイメンジョンライザー”!?”」

ローエン格林から巨大な魔力刃が現れ、ガジェット4体を飲み込み破壊する。

「イッケー!!ローエン格林!?”」

「ワシを投げるな!!」

ローエン格林を投げて、残り2体のうち1体に刺さる。

隙だらけな俺の後ろからガジェットが攻撃してくる。

「隙だらけだ!!」

しかし、俺は攻撃を瞬時に回避してガジェットを瓦礫へ蹴り落とし  
た。瓦礫に当たったガジェットは爆発した。

「ミッションコンプリートだな。」

「相棒をちゃんと扱え、この馬鹿者がっ!!」

さりげなく、ローエン格林は回収している。

「アウルくん！戻ってきてー！」

「了解。」

「後で説教だな。」

「面倒臭さいので却下。」

そんなやり取りをしつつ、なのは達の所に戻る。

「……凄いですよアウルさんっ！！！！？」

「ウオツ！？」「にやはは……。」

帰ってきていきなりの出向いに俺は驚き、なのはは苦笑いしている。

「どうやって、あんな動きしてるんですか？」

エリオが質問。

「ああ、ただ魔力の放出方向だけを変えているだけだ。ただ、今の所はデバイスでは再現出来ないから自分で演算処理しないといけない。」

「どうして、剣が赤く光ったんですか？」

キャラが質問。

「内部に魔力を流して高速振動させてるんだ。切れ味も3倍向上す

るぞ。」

「今度、回避の指導して下さい！」

スバルが懇願。

「まずは、防御に力を注げ、それからだ。」

「デバイス、バラさして下さい！」

シャーリーが懇願。

「却下。」

最後は何なんだ？

「ケチーッッ！？」

シャーリーの事は放置した方がいいな。

「これでいいか？」

「うん！有り難うアウルくん。」

「じゃあ、後はなのはに任せるわ。俺は、事務作業してくる。」

「わかった。じゃあね！」

「・・・あー。なのは。」

「どうしたの？」

「お前の分もやっとくから、終わったらすぐ休め。」

「え？でも・・・。」

「教導する側も疲れるからな。こいつらを万全な状態で教えてやってくれるか？」

「じゃあ、お願いするね。」

「任されてー。」

「・・・（ボソツ）素直じゃないんだから／＼／」

何か聞こえたか？

そう思いつつ、隊舎に戻ることにする。

『やはり、説教だな。テーマは、“鈍さ”だ。』

『何言ってるんだ？』

ふと、ティアナの方に目がいった。彼女はずっと下を向いたままだ。声、かけとくか。

「どうした、ティアナ？」

「い、いえ。何でもありません。」

「・・・・・・・・・・。力が欲しいのか？」

「!？」

「ま、いいけどな。」

「・・・・・・・・・・は？」

「ひとつだけ忠告だ。焦って力を手に入れようとするな。闇に引きずり込まれるぞ。それだけだ。」

「アウルさん？」

「じゃあ皆、しっかり訓練に励めよ。」

「「はい!!」「・・・・・・・・。」

さてと事務作業するか。

「ローエングリン、頼んだぜ!!」

「自分でやれ。」

side out

### 第3話（後書き）

旗建てるの難しいです。

次回で初日終わらせる予定です。

## 第4話（前書き）

やっと初日終了です。

長かった。

では、第4話です。

どうぞー！。

## 第4話

アウル side

隊舎に戻った俺は、事務作業をしながらローエングリンとさっきの俺の模擬戦について話してる。

「やっぱり、リミッターをかけられると速さや技の威力が落ちるな。」

「SランクからAAまで落としてるからな。お前の味が無くなっている。早急に対策が必要だな。」

「ちょっと待ってくれるか？新しいやつきたから。先に処理する。」

「話を聞かんか！？」

うるせえ。早く終わらせてえんだよ。めんどいから……。

こんな風に話を無理矢理中断させながら、作業を進める。

「対策はフェイトやシグナムに相談した方がいい。あいつらと俺は戦闘スタイルが似てるからな。」

「うつむ。よかるつ。」



「よしっ！！事務作業終了だぜ！！案外少なかったな。予定より早い。」

11時から始めて、今はもう15時だ。腹減った。

「相変わらず凄い集中力と処理能力だな。ここにいる奴らの2倍以上だぞ。」

「そうか？」

嫌いだから早く終らせる為に処理速度は上げてるが、そこまでののか？

「それよりも、早く食堂に行って何か食うもん貰おうぜ。腹へったぞ。」

「先に処理した書類とデータをグリフィスの所へ渡しにいくぞ。」

「わかったよ。」

「グリフィス准尉。」

「どうしましたか？ シュタインブルグ三佐。」

「ああ、俺と高町の分の書類終らせたから持ってきた。確認頼む。」

「エエッ！！あれ2日分あったんですよ！？」

「はあ！？あの量なら特務隊の時の一日分だぞ。」

「4人分の仕事を一日で……。」

「ちゃんと渡したぞ。……後、俺の事はアウルでいいぞ。」

「は……はい。了解しました。」

真面目過ぎるぞグリフィス！？それじゃあ、狸の使いっぱにされるぞ。

（誰が狸や！？）

ん？幻聴が聞こえた様な……。まあいい。

「じゃあな。……今度、ヴァイスと飲みに行くぞ。命令だ。親交も大事な任務のひとつだ。」

「は……。はあ。」

早く食堂行こう。腹減った。  
そう思い。食堂へ歩を進めた。

食堂に着いておばちゃ・・・いや、綺麗なお姉さんから食事を受け取って、適当に空いてる席に座る。

因みに、今回はフォーという米粉を使ったヘルシーな麺料理だ。

「ウマイッツ!? やっぱり、麺はいいよね。」

「おぬし。麺類以外食わんのか?」

「おうよっ!!」

「・・・何も言えんな。」

ローエングリンの愚痴を聞き流しつつ麺を啜る。

「あつ、アウル。こんな時間に食事?」

「ん? ああ、フェイトか。そんなお前も今からか?」

「うん。地上本部で機動六課の設立理由の説明だね。はやてと行ってきた、執務官の用があるから先に帰ってきたんだ。」

「はやてはまだ挨拶周りか?」

「うん。夜遅くまでかかるみたい。」

「はあ。頑張りますな、はやてさんは。俺、ぜってーめんどいからちやつちやと済ませるぞ。」

「アウルは少し真面目になった方がいいと思うよ?」

「聞こえんな。それよりも、早く飯取ってこいよ。食堂に来ておいで、何も食わないつもりか?」

「もうっ、つれないな。待ってて、食事持ってくるから。」

「それで、アウルはどうしてこんな時間に? まだ、訓練の途中でしよ?」

「ああ、めんどいからなのはに任せた。」

「バルディツシュ（チャキ）。」

「冗談だつて。事務作業をしたんだよ、ついでになのはの分も。俺は中途半端な立場だからな、色々あるんだよ。」

「アウル。それは本当なの?」

「何か、信用されていないのか? 俺。」

「だって、アウルってとっても面倒臭さがりなんだもん。」

「仕事でそんなしねえよ。」

どこまで面倒臭さがりだと思ってんだ？

「後で、グリフィスに確認しないと・・・。」

「・・・・・・・・。」

何かある意味信用されてるみたいだな。泣いていいですか？（本日二度目）

side out

フエイトside

「だ〜から〜！！仕事をサボったりしねえて！？信じてくれよ。」

うーん。アウルって、サボってそうな感じなんだよね。まあ、今回はいいかな。

「わかった。アウルを信じる。でも、サボっちゃダメだよ？」

「わかってるって。」

「でも、本当に久しぶりだね。心配したんだよ？何年も連絡くれな  
いし。」

「悪かったな、特務隊の任務が忙しかったから連絡寄越す暇がなか  
ったんだよ。お前らの事忘れてた訳じゃないんだが………本当に  
すまない。」

そういつて、アウルは居住まいを正して頭下げた。

「ええっ、い……いいよ。頭上げて、アウル。」

どうして、こういう時だけ真面目なのかな。

いつもちゃんとしてれば、カッコイイのにな……。

「何か言ったか？」

「!? う、ううん!! 何でもないよ! / / / / /」

「そいか? ならいい。」

声にでてたの!! 恥ずかしいよ!! / / /

「まあ、ここに来ててよかったよ。びっくりしたんだぞ!! お  
前ら3人揃っているだからよ。」

「ごめん。はやてがどうしても驚かせたかったらしくて。セアトニ

ツク少将とも話してたし。」

「あの狸め。普通に迎えられんのか。」

「そうだね。」

（だから――！誰が狸やねんちゅうとるやろ――？）

！？はやての声？

「なあ、フェイト。なんかはやての声が聞こえた様な気がするんだが。」

「え、気のせいだよアウル。はやては地上本部にいるだよ。」

「そうか？ならいい。」

はやての声が聞こえるなんて、疲れてるのかな？

side out

アウルside

フエイトと別れて自室に戻った俺は、ローエングリンのメンテナンスを兼ねて改良しようと思いデバイスルームにやってきた。

「あれ？アウルさんじゃないですか。デスクワークはもう終わったんですか？」

「シャーリーか。ちょっとローエングリンのメンテナンスも兼ねたシステムの調整にここ借りてもいいか？」

「エエッ！？アウルさん、デバイス調整出来るんですか！！」

「オイ、これでもデバイスマスター資格一級持つてるし。ローエングリンを造ったのは俺だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「シャーリー？」

「一緒にやつてもいいですかっ！！！！？（メラメラ）」

なっ・・・・・・・・？シャーリー、何か怖えぞ。

「いいですね！！後、FWのみんなの新デバイスも一緒に造ってください！？お願いしますよー！！」

シャーリーが詰め寄る。俺は、既に壁まで追い込まれている。



「逃がしませんよ？ハアハア……。」

イ・・・イ  
ヤ――――！  
――――！  
――――！  
――――？

午後10時30分

「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
はあ。  
」

「ワシが眠っている間に何があったんだ？」

「聞かなくていいか。思い出したくねえ。」

今度デバイスルームに行くときはストツパーを連れて行こう。そう心に誓いながら、腹が減っているので食堂に向かう。

「ん？なんだ、アウルじゃねえか。」

「ん？オオツ、ヴィータさんにシグナムさんではないですか！？これから食事ですか？」

「ああ、シグナムと訓練やってたらこんな時間になっちまった。」

「（コソッ）それは大変でしたね。あの人との模擬戦は疲れるでしょうっ?」

「（コソッ）全くだ。」

「聞こえているぞ、2人とも……。」

（（ビクッ!?!））

「はあ、早く食堂に行くぞ。シャマルとザフィーラを待たせても悪いしな。シュタインブルグも食事だろう?一緒にどうだ?」

「はい。喜んで。」

食堂に着いてヴォルケンリッターの皆さんと一緒に食事をとっていると。はやてが帰ってきた。

「……なんや、アウルもいたんかいな。」

「どうしたはやて?俺がなんかしたか?」

「何でもあらへんよ。（狸って言われた気がするなんて言えへん）」

「疲れてるんでしょう。今日は早くお休みになられた方がいいのではないですか?主はやて。」

「そうさせてもらっわ。挨拶周りはしんどかったさかいなー。」

「なら、明日ははやての仕事を手伝うか。明日の分の仕事は終わらせたし。」

「ええよそんなん。」

「久しぶりに話しもしたいしな、気にすんな。お前は殆ど全部自分で抱えやがるからな。心配してる身になってみろってんだ。」

これはなのはやフェイトにも言えるが、コイツは特に厄介だ。

「ウチのこと心配してくれるん？（ニヤニヤ）」

「・・・当たり前だ。」

真剣な顔で答える。大事な友人だからな。

「／／／／」

すると、はやての顔が赤くなる。熱でもあんのか？

「じゃあ、早く寝ろよ。明日も朝早いぞ。お先に失礼します。」

飯を食った俺は早く寝ることにした。今日は、色々あったからな色々。

side out

はやてside

ウー。あそこであの顔は卑怯やないか。  
何でああいう時だけ真面目になるんや？  
更に、あいつはその気がないときてるし。。

「はやてちゃん。」「はやて。」「主。」

「な、なんや？」

「」「頑張れ(って)(って下さい)。「」「」

「。。。。。」

何で慰めらやなアカンねーん！？

sideout

#### 第4話（後書き）

ヒロインとして、なのは、フェイト、はやてを決めました。

他にも絡ませたいけど・・・・・・今の实力では。

## 第5話（前書き）

ファーストアラート前のお話です。

後半は、ヴァイスとグリフィスとの絡みになります。

では、第5話です。

どうぞ。

## 第5話

アウルside

「準備はいいか？シユタイムブルグ。」

「いつでも構いませんよ、シグナムさん。」

「なら、いくぞっ！」

機動六課設立から既に1週間がたった朝。俺とシグナムさんは、既に日課になってしまった早朝の鍛練（無理矢理やらされている）をやっている。

ほぼ模擬戦みたいだが、訓練場の1/4のスペースを借りているので大丈夫だ。

「ハアッ！！」

俺は、シグナムさんに“ソニックムーブ”で接近してローエングリンを振り落とす。

しかし、それはシグナムさんに届く前に居合で俺は切られる。が、俺の姿は霧散した。

「“フェイクシルエット”か。やる・・な！」

そっついながら、シグナムさんはレヴァンティンを後ろへ振りかざし、背後から斬りつけに来ていた俺と切り結ぶ。

「いやー、さすがシグナムさん。戦いがいがありますね。」

「ふ．．．よく言う。」

鐔ぜり合いを止め、両者距離をとる。

「レヴァンティン！！」

「ローエングリン！！」

2人同時にカートリッジをロードする。

「紫電．．．．。」

「風刃．．．．。」

「「一閃っっ！？」」

2つの斬激がぶつかり合い、視界が奪われる。

その間に、俺は地上にある木を2、3本切り倒して束ねてから空に戻る。

視界が晴れると、シグナムさんは既に攻撃の体制を整えていた。

「飛竜．．一閃っ！」連結刃が俺の下に迫る。

しかし、俺は束ねておいた木を迫る連結刃の中へ転送させる。

「っな．．．！？」

「ウオォーッ！！」



驚くシグナムさんをよそに斬りかかる。

「クッ!？」

だが、シグナムさんも木を切り裂き自分の下に戻すが、それより早く接近する。

「・・・!？」

鞘を使って防ごうとするシグナムさんだが、また俺の姿が霧散し、首筋にローエングリンが突き付けられる。

「また“フェイクシルエツト”か。・・・私の負けだな。」

「フウ。これで3勝1敗ですね、シグナムさん。」

「また負け越したが、明日は負けんぞ。」

『アウルクーレン、シグナムさん。一度みんなが集まろう。』

「なのはが呼んでますんで、行きますか。」

「そうだな。」

集合場所に戻ると、FW達が疲れて座り込んでいた。

「何だお前ら。それで今日の訓練やってけんのか？」

「あ、アウルくんお早う。今日はどうだった？」

「「「お・お早うございます!」「」「」」

「ああ、お早う皆。俺の勝ち越し。伊達に特務隊の戦闘部隊長やってなかったっての。」

「ああ、6年前と比べものにならん。」

「お褒めにあずかり光栄ですが、まだまだだと考えています。」

実際に課題が山積みだからな。

「どうして、アウルさんはそんなに強くなりたいんですか？」

スバルが質問してくる。

「……強くなりたい理由……か。」

side out

なのはside

「どうして、アウルさんはそんなに強くなりたいんですか？」

「理由……ね。」

スバルの質問にアウルくんは何かひっかかるみたい。

「自分も聞きたいです。」

エリオも同じ男の子だからかな？何か期待してそう。

「強いて言うなら、償いだな……。」

「償い？」

キャラが不思議そうに聞いている。

「ああ、その為に管理局を善くしたい。だから強くなる。そうすれば……あいつらも喜ぶ。」

最後のは聞こえなかったけどアウルくん何だかいつもと違って悲しい顔をしてるの。

「そんな事より、午後の訓練は俺だぞ。みっちり、指導してやるかな。覚悟しろよ！」

「アウルさんの鬼ー！！」

「バカッ！？スバル！」

「ほう。ナカジマ二士は余程訓練が楽しらしいな……。」

「えっ？」

「全員、俺と模擬戦5連戦だっ!？」

「イヤーーッ!？」

「このバカスバルッ!？私達を殺す気!!」

「（ガタガタガタ）・・・止めて下さい。来ないでー!!ウア  
アーッ!？」

「ズルイぞっ!私は1日1回なのにつ!!」

アウルくん。それはやり過ぎだと思うの。スバル達と模擬戦やつて  
時のアウルくん恐いの。後、シグナムさん。どうして羨ましげに  
みんなを見てるの？

「変更は無しだ。愉しみ(?)にしているぞ。」

「……うわーん(泣)……」

みんなが泣くなか、アウルくんは隊舎に戻っていく。

「高町。あいつは何か私達に隠してるみたいだな。」

「そう……みたいです。」

アウルくん。一体君に何があったの？ 気になっちゃうよ……。

side out

アウル side

午後の訓練でFWメンバーの指導（という名のシゴキ）を終えて今はクラナガンのある居酒屋にヴァイスとグリフィスを連れ来ている。因みに訓練終了時なのは“デイベインバスター”をゼロ距離で撃たれた……やり過ぎらしい。

「それにしても、男だけなんて久しぶりだな。」

「そうですね、アウルの旦那。」

「ヴァイス、その呼び方止めてくれないか？」

旦那って、俺はまだオッサンじゃねえし。

「んじゃ、アウルの兄貴で。」

「……好きにしろ。」

「ん？ どうしたんすか、グリフィス准尉？ ずっと黙ったままで。」

「えーと。こういう所は滅多に来ないので……。」

「まあ、慣れる。これから、付き合いで行くようになるからな。」

「はい……。」

「それよりも兄貴!？」

「どうした?急に真面目な顔しやがって。」

「どうやって、あの隊長達とあそこまで仲良くなれんすか?!」

「はあ?なのは達の事だろうが、どうしたんだ?

「お前も仲良いじゃねえかよ。」

「違うつす。俺は仕事関係の話とか少し世間話するぐらいっすよ!」

「自分もそうですね。それに、八神部隊長とお話する時によくアウル三佐の事がですよ。」

「カーッ!?管理局三大美少女達と仲良しな男は兄貴ぐらいっすよ!羨ましすぎる!？」

「三大美少女?」

「フェイトさん達の事ですよ!!管理局員ならみんな知ってますよ!」

「仕方ねえだろ。特務隊は、年中無休で管理世界飛び回ってんだ。」

世間にも疎くなるんだよ。」

休暇貰っても次元航行艦の中とか、臨時出動とかあるから基地の中にいたし。

「後、俺以外にも仲良い男ならクロノさんとかユーノとかいるだろう。」

「いや、クロノ提督は奥さんいらっやいますし。ユーノさんはアルフさんと付き合ってるじゃないですか。」

「何っ！ユーノとアルフが！？」

クソッ！？俺だけ独り身かよ！

「それよりも、何かきっかけでもあったんすか？」

「ん〜。初めて会ったのが、6年前の次元犯罪組織の検挙任務の時じゃなかったかな。あの時はあいつらをただの上官だと思ってたから普通に敬語使ってたな。」

「へえー。それからの付き合いなんですか？」

「ああ、それから半年はアースラに所属していたからな。……ずっと何かしら付き纏われてたな。朝起こしにくるわ、一緒に訓練をしようって自主練邪魔するわ、部屋が汚いから掃除するって言っ  
て私物を漁るわ、折角休みだつてのに無理矢理買物に付き合われるわ、それから……。」「

「もういいす。十分、貴方が幸せだったことはわかったす！」

「オイ、俺の話しのどこに幸せを感じる所があるんだよ。面倒臭さ過ぎるだろ、こんな事されたら。」

「ウルサイッ！？独り身の気持ちなんてあんたにや分からんよっ！」

「グリフィス、ヴァイスは気でも狂ったか？」

「……え？ええ、まあ、そうなんじゃないですか。」

『グリフィス！！（怒）』

『ダメですって。この人は半端な事では気づきませんって。』

「何、念話なんてしてんだ？」

「（そんな事は気づくのかー！）（」

「で、でも隊長達と仲がいいのは事実なんですよね。」

「まあな。数少ない親友だったのは確かだな。」

「それ以上の関係はないんすか？」

「……………（ボソツ）こんな奴でいいわけがねえよ。」

「どうかしました？」



「いいや、何でもねえ。3年も会ってなかったから、まだわかんね。それより、お前はとうなんだ？」

あんな良い奴らと俺が釣り合う訳ねえのにな。

『あいつらなら大丈夫だと思うぞ？ちゃんと受け入れてくれるはずだ。良い奴らだしな。』

『良い奴らだからだ。そこにつけ込んだみたいでいい気分がしねえし。それに、俺の夢にあいつらを利用する気はねえ。』

『全く、頑固じゃの。』

「ヨシ、飲むぞ！！奢るからお前らもドンドン飲めよ！」

「いいんすか!？」

「有難うございます、アウル三佐。」

「その代わり、お前らも教える。気になる奴いるだろう。」

「自分はまだ仕事に慣れてなくてまだ……。」

「俺はもちろんフェイトさんで！」

あの笑顔に騙されたくちか……。フェイトは誰にでもあの笑顔を向けやがる。最初は騙されかけたからな……。誰があんな純粹なままにしたんだ？

「ヴァイス、お前は無理だ。あいつは特に。」

「無理だと思いますよ。」

「やってみなければわかんっ!？」

そんな会話をしつつ、改めて自分の存在を確認した。

s i d e o u t

## 第5話（後書き）

次回は、ファーストアラート編に突入したいと思っています。

ご覧になってください。

## 第6話（前書き）

リニアレール編について突入！

今回は、出勤までのお話です。

では、第6話です。

どうぞー。

## 第6話

アウル side

機動六課始動から2週間経った朝、シグナムさんとの日課の鍛練を終えた俺は、別の管理世界での任務に着く準備をするシグナムさんと別れてなのは達の訓練を見に来ていた。

「おつ、あれはシュートイノベーションか。アクセル10個とは、昨日より2個増えてるな。」

「そのようだな。」

ん？スバルへの支援が遅いな。ティアナのアンカーガンもうダメか？

「ほれ、終わったようだぞ。」

「最後はエリオか。40点ってとこだな。実戦に出ても大丈夫そうだ。」

「相変わらず厳しいな。」

「それが上官つてもんだよ、1人位必要さ。」

などと話しながら、なのは達の下に移動する。

「ヨッ！皆、訓練お疲れさん。」

「『『『お疲れ様です！』『』『』」

「アウルくん！お疲れ様。」

「皆、大分良くなっているがまだまだだ、これに驕らず訓練に精を出して欲しい。」

「『『『はいつ！』『』『』」

「アウルくんは相変わらず厳しいよね。」

「厳しい上官が居ないから仕方なくな。」

「にはは……。」「

「キユク〜。」「

ん？フリードが何か変だな。それに……。

「スバル、ローラーから煙りでてんぞ。」

「え？わあ！あちゃー。無茶させちゃった〜（泣）」「

「どれ、みせてみる。」

うーん。駆動回路が焼き切れてて、他のパーツも損耗が激しい。よく動いてたな……。

「こりゃ、ダメだな。もう寿命だ。」

「そんな〜（泣）」

「うーん。ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「はい・・・騙し騙しです。」

「じゃあ、実戦用の新デバイスに交換かなー。」

「新・・・。」

「デハイス・・・ですか？」

「まあ、そろそろだとは思ってたが。いいのか？なのは。」

「うんっ！もうみんなも大丈夫だよ。アウルくんも心配症だなー。」

「それなら、善は急げというしな。午前の訓練を終わらせて、皆で取りに行くか。」

「じゃあ、シャワー浴びたら着替えてデバイスルームに集合ね。」

「・・・はいっ！」「」「」

「あの車って・・・。」

皆で隊舎に戻つてると前から1台のスポーツカーがやってくる。

「八神部隊長！？フェイトさん！？」

車に乗っていた2人にキャロが驚いた様だ。

「それ、フェイトさんの車だったんですか？」

「うん。地上での移動手段なんだ。」

「お前、スポーツカーなんて買ったのか。」

「運転もしやすいし燃費も意外といいから、これにしたんだ。」

「因みにいくらだ？」

「　　だよ。」

「案外、安いな。」

『でしょ。』

うつむ・・・最近休みも増えたし、一度見に行ってみるか。

（注意：フェイトさんの車は、普通の管理局員の給料3年分です。）

「それより。みんな訓練頑張ってるか？」

「ええっと・・・。」



「頑張ってます・・・。」

「ごめんね、エリオ、キャロ。私がライティングの隊長なのに・・・訓練全然見てあげられなくて。」

「そんなっ!」

「大丈夫です。」

「そう・・・ならいいんだ。」

エリオもキャロもまだ甘えてりやいいのに、フェイトがあらぬ誤解をしてそうだ。・・・面倒臭さ。俺に相談に来るな、確実に。

「それで、はやてちゃん達はどこかにお出かけ?」

「ちよつと六番ポートまで・・・。」

「これからカリムと会談や。」

「ん? グラシア少将とか? なら、クランさんがよろしく言ってたと伝えといてくれ。」

「ええよ。」

「私はお昼前に帰ってくるから。お昼は、みんなで一緒に食べようか。」

「「「「「はいっ!(うんっ!)」」」」」

「ほならなー。」

はやてとフェイトと別れた後、訓練報告書作成してからデバイスルームになのはと来ていた。既にデバイスの受け渡しは終わってるみたいだな。

「ごめんね。遅くなっちゃった。」

「遅れてすまない。」

「なのはさん。アウルさん。ちょうどデバイスの説明に入るところです。」

「アウルさん。」

リンが俺の肩に乗ってくる。

「リン。何故、俺の肩に毎度の如く乗るんだ？」

「アウルさんの肩は座り心地がいいからですよー。」

「ムツ……。」

呆れた理由だな。ん？何だ？急に寒気が。

『アールくん？』

『どうした？なのは。』

『別に。（リン、羨ましいなー。あんなにアールくんの側にいて  
（』

『体調悪いのか？何かあったら言えよ。』

『うん。（本当に鈍感だね。心配してくれるのは嬉しいんだけど。  
（』

「出力リミッターって、なのはさん達のデバイスにも掛かってます  
よね。」

なのはと念話してたらティアナが質問してきた。

「うん。でもまあ、私達は本人にも掛かってるんだよね。」

「ええっ！？」

「リミッターがですか！？」

「そうだ。部隊長と隊長と副隊長達と俺に掛かってるぞ。スバル、  
能力限定って知ってるか？」

「ええっと……。」

「にやはは。部隊の魔力の総保有量って決まってるでしょ。だから、

優秀な魔導師をたくさん集めたい場合は、本人にリミッターを掛けて規定内に収めるの。」

「裏技だけだな。特務隊は使わないけどな。」

「何でですか？」

「特務隊には人員徴収権の中で能力限定は適用外だからな。勉強になったか？キャロ。」

「有り難うございます。」

「それで、なのはさん達にはどれくらいランクを落としてるんですか？」

「私は2・5ランクダウンでAAだよ。アウルくんは？」

「俺は2ランクダウンでAAだな。」

「はやてちゃんは4ランクダウンですよ。」

「4ランクダウンって事は、部隊長はSSだから……。」

「Aランクまで落としてるんですかっ!？」

「はやてちゃんも苦労してるんですー。」

指揮官は前線には基本出ないから困らんと思うが。  
それから何故リミッターについて話してんだ？しかも皆暗くなって

やがるし。

などと思いながらもリミッターの解除の方法や午後からのデバイス調整の話しをしていると。

ヴィーッ！ヴィーッ！

「このアラートは！」

「一級警戒態勢！？」

「グリフィスくんっ！！」

「はい！教会本部からの出勤要請です！」

レリックか！？クランさんからの情報より早い！！

「なのは隊長、フェイト隊長、アウル副部隊長、グリフィス君！こちらはやて。」

「こちらフェイト。・・・状況は？」

「教会調査団がレリックらしき反応を見付けた。場所は、エイリム山岳丘陵地帯！対象は、リニアールで移動中。」

「移動中って！！」

「まさかっ！？」

「ジャックされたか。ガジェットの数？」

「車内に最低でも30体。他に大型や飛行型も来るかもしれん。」  
大型がいたら、今の新人達では抑えらんな。

「いきなりハードな出勤やけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、  
アウル・・・いけるか？」

「私はいつでも。」

「私も。」

「俺もだ。」

「スバルにティアナにエリオにキャロ。みんなもいけるか？」

「・・・はいつ！」「・・・」

「いいお返事や。シフトはA-3。グリフィスは隊舎で指揮、リイ  
ンは現場管制！」

「・・・はいつ！」「・・・」

「アウルには、現場指揮をお願いするな。」

「了解しました。」

俺ははやてに敬礼をする。任務時は、仕事モードに切り替えるのが  
俺流だ。他は・・・面倒だから。

「ほんならっ！機動六課、出勤や！」

「了解！！（一斉に）」

こうして、機動六課始動以降、初となる実戦に出動することになった。

新人達の訓練不足はいがめないが、やるしかないだろう。

side out

## 第6話（後書き）

ネタが案外思い付かなくなってきましたので、投稿が少し遅くなると思います。

しかし、読んで下さっている皆さんの為にも投稿は続けていきますので、よろしく願います。



## 第7話（前書き）

投稿が遅くなつてすみません！

今回で、リニアレール編終了です！最後には、少しあの人も初登場します。

では、第7話です。

どうぞー！

## 第7話

アウル side

現在、俺達はエイリム山岳丘陵地帯でガジェットにジャックされたリニアレールにヘリで移動中だ。

「高町はスターズを指揮して前方から、俺はライトニングを指揮し後方よりレリックを目指す。リインは俺達が突入後、リニアの制御システムの奪還を行ってもらう。」

「了解！」

「初の実戦だが、なめに何時もの訓練通りにやればいい。お前達の活躍、あてにしている。」

「「「「はいつ！」「」「」」」

「レーダーに熱源多数接近しておるぞ。」

「何！新手か。タイプと数、分かるか？」

「高速で接近しておる故、飛行型じゃな。数は20の編隊を3つ確認した。もうすぐ、観測隊も捉えるじやろう。」

《飛行型出現！現地観測隊を捕捉！》

「凄いだね。ローエングリンって。」

「まあ、4つの簡易AIと高度AIで構成されてるからな。」

「ふえ〜。その大きさを・・・有り得ないよ。」

「それより、作戦変更だ。高町と俺は制空権を確保に向かう。後は変更無しだ。少し厳しいが、増援の恐れがある。心してかれ!」

「「「はいっ!」「」「・・・はい。」

キャラが不安な顔をしている。少し落ち着かせるか。

「キャラ。」

「は、はい。」

「自分の力が怖いのか?」

「っ!?!・・・はい。」

やはりな、キャラはフェイトに保護されるまで皆にその力を恐れられていたとフェイトから聞いていた。

「キャラ。聞いて欲しい事があるが、いいか?」

「はい。」

許可をもらったので、キャラの近くまで行く。

「力はただ力だ。それは、変えようがない。正直、キャラが自分の

力を怖がるのも分かる。俺もそうだからな。」

「アウルさんも・・・ですか？」

「ああ。でも、その力は人を傷つける事も出来るし、人を守る事も出来る。」

「人を守る・・・。」

「そうだ。だから・・・。」

そう言いながら、キャロの頭を撫でる。

「あ・・・。」

「この任務では、俺は一緒に行けなくなったからエリオを守ってやってくれないか？こいつ、俺の訓練では1番によくやられるし。」

「アウルさん！！それは1番に僕を狙ってくるからですね！」

「あははは・・・頼むな、キャロ。」

エリオは無視。

「はいっ！」

「アウルさん！？」

「よしっ。ヴァイス、ハッチ解放！出撃する！」

「了解っす！兄貴！」

「高町。先に出るぞ。後につけ！」

「了解！」

「ロングアーチ05、アウル・シュタインブルグ。出るぞっ！！」

さーて、敵さんをお出迎えとしますか。

side out

なのはside

アウルくんが出撃した後、私もキャラに言った。

「キャラ。キャラは一人じゃないよ。離れていても通信で繋がってる。みんなで助け合える！アウルくんはああ言ってたけど、すぐに助けに来てくれるよ。それに、キャラの魔法は、みんなを守ってあげられる、優しくて強い魔法なんだから。頑張って！！」

「はいっ！」

うん。キャラも緊張が取れたみたい。

「スターズ01、高町なのは。いきますっ！！」

私も出撃して、アウルくんの後を追う。

「お待たせ。」

「遅いぞ。敵との接触まで、後2分だぞ。」

「わかってます。アウル副部隊長。」

「……あいつらは大丈夫か？キャロは特に。」

「任務中でしょ。私語は慎んで下さい。」

「わかってるが……。」

「ふふふ。」

いつもは素っ気ないのに、ちゃんとみんなの事は心配してるんだね。変わらないな。

「……笑うな。」

「やっぱり、素直じゃないよね。みんなにもそうやって接すればいいのに。」

「ワシもそう言ってるのだが……頑固だな。」

「そのようですね。」

（レイジンググハート）

「うるさいぞー！」

でもどうしてだろう。アウルくんは何だか私達とはまだ距離を置い

ている気がするのは。

side out

アウルside

「第一派、二個編隊40機来るぞ。」

ローエングリンが敵の接近を知らせる。  
目視でも確認出来る様になってきた。

「高町。」

「え・・・は、はい！」

「どうした？もうすぐ戦闘だぞ！しっかりしろ！！」

「すみません。」

「ならいい。敵編隊への砲撃を頼む。位置は、第1編隊中央より左5度だ。」

「了解！レイジングハート。」

「わかりました。」

「デИБайーン・・・バスターツ！！」

なのはの砲撃が敵編隊に直撃して6機撃墜する。スゲーなおい。  
すると、第1編隊が4機と10機に別れ、第2編隊は10機ずつに  
別れて包囲してくる。クソッ！面倒だなおい。

「高町は左翼前方4機を突破せよ。俺は右翼前方10機を突破する。  
ローエン格林ン！！」

「うむ。ソニックフォーム、スタンバイ。」

すると、ローエン格林ンが双剣になり、バリアジャケットも黒のジ  
ヤケットとズボンとなる。機動戦を重視したフォームだ。

俺は敵編隊に“フラッシュムーブ”を使い接近する。この魔法は、  
“ソニックムーブ”よりも数段速度が落ちるが、高速移動中でも戦  
闘が可能な点で俺はよく利用する。

飛行型に次々と接近して撃墜していく。因みに、突破までに7機撃  
墜した。なのはも更に4機撃墜したようだな。

「アウルくん！前から20機接近中だよ！」

なのはの言う通り、第2派の20機が接近中だ。

「よし。予定通りだ。前方の編隊を吹き飛ばす！ローエン格林ン！  
フルドライブ！！」

俺はエセ鬼斬り（？）の態勢で待機する。

「魔力圧縮、完了した。」

「“風刃乱舞”！？」



双剣を振るうと、ローエングリンから突風が発生して、前方の飛行型の編隊を襲い、突風の中にあつた無数の魔力刃によって、前方の飛行型は全機撃墜した。

「・・・アウルくんって、ホントにベル力式？」

「後ろの編隊が来るぞ。気を抜くな。」

「ゴメン！遅くなった！」

フェイトがやって来た。これで大技は使わなくてすむな。

「よし！残りの奴らを蹴散らす！敵増援を考え、魔力消費は極力抑えろ！！」

「「わかった！」」

「制空権は確保出来た様だな。新人達は？」

「どうやら、上手くいっとるみたいだぞ。リニアの制御システムはまだ奪還できておらぬようだ。」

「そうか。」

『高町、ハラオウン。この空域の監視を頼む。俺は新人達の援護に向かう。』

『わかった。』

『気をつけてね。』

俺は、リニアの援護に向かっていたのだが。

「ッ！新型を確認した！現在、ライトニングと交戦中だ！苦戦しておる！」

「何！？クソッ！急ぐぞ！！ローエン格林！」

「わかっておる！！」

全速力で向かっていると、エリオが新型のアームで崖へ投げ出されているのが見えた。

「エリオ！？」

俺は、また守れないのかよ！？チクショー！！

side out

キャラ side

私達は順調にガジェットをやっつけて、レリックのある車両までもうすぐのどこまで来たの。

このままレリックまで行けると思ってた。

すると、いきなり前の車両から何本かのアームが私達を襲ってきた。

「ガジェット！？」

「大きい！」

こんなに大きいガジェットなんて知らないよ！

「僕がいく。」

「気をつけてね！」

エリオ君がストラダで斬り付けるけどガジェットは傷一つない。

「なんて硬さだ！」

エリオ君が攻撃してきたせいなのか、ガジェットがAMFを展開した。

「AMF!？」

「こんな遠くまで!!」

これじゃあ、ブースト魔法も使えないよ!!

「うわあっ!!」

ガジェットのアームでエリオ君が壁に叩きつけられ気絶した。そして、そのまま崖に投げ出された。

「エリオ!？」

ふと、微かに声が聞こえた。アウルさんが必死になって、こっちに向かって来ていた。顔を見るとただ助けたい、そんな気持ちが見え

た。いつも私達に厳しいアウルさんがあんなに必死で守ろうとしている。

嬉しかった。アウルさんはいつも私達の事を想ってくれていることが。

守られるだけじゃ嫌だ！私もみんなを守りたい！

私は、リニアから崖へと飛び降りた。

side out

アウルside

「キャロー！」

《アウル三佐。援護はいらへんよ。》

「どうしてですか！」

《キャロの竜召喚見たないんか？》

「あ……………」

《やっぱり忘れとったか……。ほら、見てみい。》

見てみるとキャロがフリード（デカver）を召喚したところだった。エー……！？俺、心配損ですか？コラ、グリフィス笑うんじゃないねえ！！

《やっぱり、アウルは変わらんゝ（笑）。》

「……あの、泣いてもいいですよ？男だって泣いてもいいですよ！」

「構わんさ。任務が終わってからならな。」

レリックを確保した俺は、引き継ぎ任務に着く事にした。

「アウルさん。」

「キャロ？どうかしたか？」

「私決めました！守るために力を使っつて！」

「そうか。」

「それから……お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

「え？いや、何で？」

「ダメ……ですか？」

何！？この歳で上目遣いで涙を瞳に溜めて見つめてきやがる！

「わ……分かった。ただし、任務中はダメだ。」

「はいっ！お兄ちゃん！」

「ほら、任務に戻れ。」

「うんっ！えへへ。」

嬉しそうにキャラは任務に戻っていく。

「アウル。」

「フェイトか。」

「羨ましいな。あんなに嬉しそうなキャラ、久しぶりに見た。」

「……お前は不器用だな。」

「アウルには言われたくない。」

「ちゃんと話しあってみろよ、親子揃ってさ。」

「でも……何を話せばいいの？」

「何でもいいんだよ、些細な事で。時間が無いなら、仕事手伝ってやるからちゃんと話しあえ。」

「うん、わかった。有り難う、アウル。」

「つたく、分かったなら早く任務にもど……。」

「どうしたの？」

視線を感じる。監視されているのか？

気配を探っていると、左前方の空に光が少し反射されている場所がある。

「そこかつ！」

ローエングリンから魔力刃を飛ばし破壊する。

「え？」

「警戒レベルを上げろ！司令部にも通達！他にもサーチャーがあるかもしれん、見つけ出せ！」監視というよりは観察に近いな。しかし、誰が。

そんな事を考えつつ、現場に指示を出した。

side out

マッドさんside

「サーチャーが破壊されました。」

「その様だね。他のサーチャーも引き上げさせてくれ。」

「よろしいので？」

「構わんさ、データは十分に採れた。これ以上は労力の無駄だ。」

「わかりました。」

「しかし、実に素晴らしい。興味深い素体が揃っている。そして・

・生きて動いている“プロジェクトF”の残滓に会えるとはね！最高の気分だよ！」

「それだけですか？ドクター。」

「ああ、“紅い刃”までいるとは思わなかったよ。しかも、私特製のサーチャーを見つけ出す程の実力とは恐れ入る。早急に対策を考える必要があるそうだ。」

「でも、愉しそうですね。」

「困難な壁を乗り越えるのは、科学者としての使命だと私は思っている。実に愉しみだよ！フハハハハハ！アーハハハハハッ！」

（ダメだこの人。）

side out



## 第7話（後書き）

お知らせです。

メインヒロインをなのはにしようかと思っています。

理由は、ヴィヴィオのパパイベントが欲しいからです！！それ以外だと考えてもアイデアが出て来ない！

でも、アイデアが浮かんだら、必ずそれぞれのルートを作成したいと思っています。

所謂、引き延ばし作戦です。

こんな作者ですが、よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2060ba/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男

2012年1月14日16時48分発行